

## 加藤多一・著 詩集『タイチの場合』

詩誌「フラジャイル」公式ブログ (2021. 5. 16) に掲載

### 詩集『タイチの場合』 柴田 望(旭川市)

ブックカバー裏に印字のあるように、販価「悪税込み」で1,200円でした☆ また、《著者サイン》もあらかじめ印字されているという素晴らしい御配慮の行き届いた一冊、ずっと手放さず、大切にさせて戴きます。誰もが当たり前前に払っていて、すでに議論もされていない消費税を「悪税」と名づける御姿勢、評価の定められた歴史や事実として流される報道をそのまま信じるのではなく、「わかっていると思うことにまず羞恥せよ」(「拜啓俊輔さま」)。島崎藤村が東條英機の文章や演説の校閲をして助けていたことを、保坂正康が調査し明らかにした。その藤村への思いを語る「文学の光と闇と…」、蠣崎波響の名画「夷酋列像」に隠された背景をあばく「枝を焚く」では「クナシリ・メシリの戦い」(根室市の指定史跡、寛政の蜂起和人殉難墓碑に、和人側の目線で刻まれた事件)が紐解かれる。私たちが学び直さなければならぬ事実、いつ何が起こっていたか。その歴史の延長線上で、今何が起こっているか。

「展示に力を入れれば入れるほど

当局が必死にかくそうとしているものの正体が見えてくる

白老町に作るアイヌ民族博物館

あれも必死になって歴史的事実をかくすに違いない」

「褒美をもらい酒食を受け 家老の絵のモデルになる屈辱

民族仲間を裏切って犯人さがしをやり

一人ずつ首をはねられていくのに耐え

降伏すれば助命するという約定があったのにと 怒りペウタンケする牢内の仲間たち

それも一斉射撃 それを見ていた長老たち」

(「枝を焚く」 加藤多一『タイチの場合』)

## 道内で刊行されている詩誌とブログで紹介されました

北海道詩人会議発行「詩の伝言板 No. 351」(2021. 5. 1) に掲載

### 詩集『タイチの場合』の頁をめくれば 田畑悦子(岩見沢市)

小樽市在住の児童文学者の加藤多一(87歳)さんが初めての詩集を発行した。「処女詩集、おめでとう」と祝するのが通例だが、失礼ながら似合わない。

まず、通して読んでみて、強い意志から生まれた詩群であった。社会(政・官)にはびこった付度から最も遠いところに位置する著者の清々しく、気骨あふれる態度に私は感動した。

／“特急サロベツ”の座席では「現在形」が見事に飛び去っていく／(飛び去る現在形)

／凍る おまえは鋼の匂い／(凍死について)

表現のリアルさ。発見の鮮度のよさ。

「文学の光と闇と…」

島崎藤村という大作家が、陸軍大臣・東條英機の演説原稿を推敲していた—調査したのがノンフィクション作家の保坂正康で、それをラジオで聞いて書いた詩。解説のような表現が多く、少し気になった。

有名作家から無名の小学生まで、国民総動員の戦争遂行。全て事実だ。

加藤さんは若い時から、藤村の詩を愛誦し、小説「破壊」「夜明け前」などを愛読し、自身の文学形成の栄養とされたのだろう。

／20歳ころの憧れが体内から消えて行かない／それが苦痛と呼ぶかそれとも—／と、正直に内面を吐露している。

正直な方だ。詩の発表は、小樽詩話会の雑誌。どの詩も息づかい、人生観が伝わってくる。数え間違いがなければ64編、詩による自分史がずっしりと重い。天皇制やアイヌ民族の問題など、ずばり、すっきりした切り口が胸を突いてくる。販価1200円(悪税込み)の表示は自費出版だから出来ること。思わず拍手!です。

